活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第13号/平成17年12月26日発行　青森県立保健大学広報誌

第3回青森県立保健大学学術研究集会

大学祭

韓国仁濟大学への派遣

現代GP

CONTENTS

第３回青森県立保健大学学術研究集会…… 2
大学祭…… 4
保護者懇談会…… 6
学生活動…… 7
高大連携事業…… 8
日韓共同未来プロジェクトに参加して…… 10
韓国仁濟大学への派遣…… 11
就職活動・卒業生懇談会…… 12
卒業生から…… 13
健康科学教育センター事業…… 14
大学院関係…… 15
現代ＧＰ…… 16
学会等紹介…… 18
ケアマネジメントフォーラムｉｎ青森 …… 19
研究活動／公開講座…… 20
特別講座…… 21
教育センター活動（研修科・国際科）…… 22
秋の園遊会／カウンセラーの紹介…… 23
人事異動・入試案内・編集後記…… 24

健康科学研究センター長 上泉　和子

1. 3回目を迎えた青森県立保健大学学術研究大会

青森県立保健大学学術研究集会は今年で３回目を迎えることができました。第１回目は大学の学術研究集会として開催しましたが、第２回目からは、青森県健康福祉部が開催してきた「健康福祉職員研究発表会」と本学の学術研究集会を統合発展させ、学術の発展と地域貢献をさらに強化することをめざし、大学と県とが共同で開催するようになりました。

今年度は去る9月22日㈭に本学を会場として開催され、162名の参加者がありました。参加者のうちわけは、本学の教職員が71名、他機関からの参加が76名、本学の学生は15名が参加しました。

今年度のメインテーマは、「青森県の保健・医療・福祉における包括ケアの発展をめざして」として、シンポジウムと一般演題（口述発表、ポスター発表）でプログラムを構成しました。それぞれの発表の内容を紹介いたします。

2. シンポジウム「青森県内の包括ケアシステムの充実に向けた課題」

青森県では平成９年度から、全国にさきがけ、本県独自に「保健・医療・福祉包括ケアシステムづくり」に取り組んできました。これは、「保健・医療・福祉のサービスを必要なときに一体的に提供するために、サービス提供に関わる機関が連携を図る」利用者本位のシステムです。本学ではもとより、看護学科、理学療法学科、社会福祉学科が互いに連携しあいながら、学生は各分野の専門性を生かしつつどう連携をとるべきかを考え学習する機会が提供されています。保健医療福祉の連携は、現在のヘルスケアサービスの大きな課題となっており、今年度のテーマとして選びました。

シンポジストは、青森県健康福祉部佐々木悟次長、本学看護学科（研究センター長）上泉和子教授、理学療法学科川口徹助教授、社会福祉学科大山博史教授の４人で、看護学科石鍋圭子教授が座長を担当しました（写真１）。

写真１　シンポジウム「青森県内の包括ケアシステムの充実に向けた課題」の全体討議

まず最初に、佐々木氏から青森県における包括ケアシステム構築の取り組みと、今後の推進の方向性として、①包括ケアシステム自己評価手法の開発と普及、②地域連携パス、③地域包括支援センターの役割、について紹介をいただきました。本県の取り組みは全国的にも注目されており、日本医事新報（No.4247）に「地域連携パス：青森県の標準化モデル」として掲載された旨、ご紹介いただきました。

次いで看護学科上泉教授から、青森県包括ケアシステムの一つとして創設した「橋渡し看護」の取り組みの紹介がありました。青森県内の病院で地域連携部門を有しているところは、平成14年では58.2%だったところが、16年12月には91施設（83.5%）に増加したことが報告され、橋渡し看護職の継続的な育成が必要であることが強調されました。

川口助教授からは、過疎地における訪問理学療法の成果について報告がありました。地域には訪問を心待ちにしている在宅障害者の方々がいること、そして訪問理学療法が確実にQOLの向上に貢献していること、さらに本人や介護者の方々の安心につながっていると述べられました。

4人目のシンポジストである大山教授は、地域介入による自殺予防をテーマに、わが国における高齢者自殺予防活動の実績をもとにして、活動実施の適応と効果を分析し報告しました。中高年男性の自殺には予防戦略が重要であり、抗うつ剤の投与、器質因子に対する精神科的管理が衝動性コントロールを図ることなどが述べられました。

それぞれの報告の後、指定討論者として、むつリハビリテーション病院技師長の中村正直氏、東通村健康福祉課の伊勢田昌代氏から、包括ケアシステムの課題等が話されました。

3. 一般演題（口述発表、ポスター発表）

一般演題の口述発表は2つの会場で17題の報告がありました。このうち11題は、県内病院、保健センター、など他機関の方の発表でした(写真２)。ポスター発表は14題で、A棟1階のホールを使って掲示し発表されました(写真３)。発表者の中には本学卒業生の卒業論文の報告、大学院生からの報告、また関係機関の若手実践家からの報告などがあり、本学術研究集会が若手研究者や若手実践家の発表の場として機能していくことを期待し、啓発活動を進めていきたいと感じました。

テーマは、健康寿命アップ、食品に関する基礎研究、環境問題、地域でのヘルスケア、専門職教育、など健康に関する幅広い方面からの報告がありました。

写真２　一般演題（口述発表）質疑応答風景

写真３　一般演題（ポスター発表）風景

4. 青森県立保健大学学術研究集会の発展を期待して

本学術研究集会は、青森県内の健康にかかわるすべての職種や機関の方々の活動や研究の成果を発表する場として、たいへん有意義であると思っております。参加者は増加傾向にあるものの、さらに多くの方の参加と発表を期待するところです。本学術研究集会を知って発表や参加していただけるよう、啓発活動を進めていきたいと思っています。

研究開発をとおして地域社会へ貢献することをめざし、産官学の連携研究開発、共同研究開発の発表の場として、また研究シーズの発掘の場として本学術研究集会が、活用されることを期待しています。現場で実践した新しい試みや改善報告などは、研究開発を発展させる基盤として重要な報告であると位置づけておりますので、こうした実践報告もますます盛んに行われ、交流が深まることを期待し、研究センターでも推進していきたいと思っております。

第7回大学祭を終えて

大学祭実行委員長（社会福祉学科2年） 佐藤　香

はじめに

昨年の大学祭実行委員会にまったく関っていなかった私が、いきなり大学祭実行委員会の会長をすることになったので、最初から最後まで、不安と焦りの連続でした。それでも、なんとか形になって、当日運営できたことを嬉しく思うと同時に、多くの方々の協力があったからこそだと、感謝の気持ちでいっぱいです。

今年の大学祭のテーマは、実行委員会の人が考えてくれました。

ほっとする
健全さ
出して
いぐべし　保健大

このテーマの左の頭文字「ほ健出い」は「ほけんだい」のあいうえお作文になっています。保健大という場所に、多くの地域の方々が集まってくれたらということでこのテーマになりました。大学祭が終了した今、ほっとしたい気持ちでいっぱいなのですが、まだ実行委員長の仕事が残っています。すべてが終わったら、改めて自分にお疲れ様と言いたいです。

子供達にも大人気！アートバルーン

大学祭を終えて

今年は、実行委員会が少なく、また組織すること自体が遅かったせいもあって、昨年とあまり変わらない企画内容になってしまいました。

縁日の風景

８日(土)は天候が悪く、外での模擬店ができるかどうかが微妙な状態でした。しかし、天気予報では、午後からは曇りになるとのことだったので、外での模擬店を行うことにしました。午後からは何度も雨が降ったものの、雨は止んで、テントでの模擬店も無事に終了することができました。この日は大学祭とは別に、Ｃ棟で親と大学の懇談会が行われ、帰りに大学祭に寄っていってくださる方も多く見られました。１日目のみの企画として、安生園の方による演奏会、縁日の場所を使っての手作り教室を行いました。安生園の方による演奏会と手作り教室は、昨年も行った企画で、今年も快く承諾してくださいました。天候の影響もあって、急遽場所を変更して管理棟内で行うことになりましたが、素敵な演奏に足を止めて聴いてくださった方もいて、成功したと思います。このほかにも、献血バスが来て献血を行ったり、ウィメンズネットあおもりの方々が銀細工コーナーやフリーマーケットを行うなど、外部の方も参加していただきました。野球の公開試合も行う予定でしたが、あいにくの雨で、中止になってしまいました。１日目が終了すると中夜祭として、講堂を使って保健大のバンドサークル「ステレオカンパニー」によるライブが行われました。９日(日)は天候にも恵まれ、太陽の下で模擬店が行われました。晴れた甲斐あって、多くの方がお越しくださいました。９日のみでしたが、日本原燃など電力会社４社が合同でエネルギーコーナーを開いてくださいました。大学祭２日目が終了すると、後夜祭が行われました。中夜祭に続いてステレオカンパニーによ

るバンド演奏、テクニカルサークルによるダンスの披露、女装コンテストにビンゴ大会も行われました。また、後夜祭の締めくくりとして、60発の花火も打ち上げられました。両日開催したものとしては、各サークルのパネル展示、保育園・幼稚園児の絵画展、スタンプラリー、教員による研究発表、入試相談、縁日、映画上映、アマチュアバンドによるライブ、フリーマーケット、体育館では、バスケットサークルによる3 on 3も行われました。そのほか、外部からは、リンゴ試験場の方による新品種や市場に出回っていないリンゴの食べ比べ、青森市内の小規模作業所や授産施設の展示・即売会などが行われました。アマチュアバンドによるライブ「music popcon festaーＬＩＶＥ2005ー」では、予定していた業者が、スケジュールがあわないとのことで、急遽他の業者と連絡を取ることになり、業者とイベント担当のメンバーに大変迷惑をかけてしまいました。また、後夜祭についても、業者との打ち合わせが本番近くになってしまい、またリハーサルの打ち合わせ調整もきちんと出来ていないということになってしまいました。もう少し、私が指揮を取れたらな、と反省しています。

大盛況のそば屋

広報は、去年の3分の1の人数で行うことになってしまいました。それでも、企業への連絡や、協賛のお願いをするために企業へ訪問するなど、皆で分担し、多くの企業から協賛していただくことができました。例年のパンフレットが見づらいということだったので、今まで行っていた企業の広告を無くし、パンフレットの裏面に、企業名を掲載するということにしました。しかし、企業の名前を間違って掲載してしまい、パンフレットが出来上がってから訂正するなどのミスが起きてしまいました。企業の方には大変申し訳ないことをしてしまいました。

性について考えよう！SMILEサークル

終わりに

私自身、誰かの上に立って指揮をとるということをあまりしなかったので、とても不安でした。しかも、昨年はまったくと言っていいほど大学祭実行委員会の仕事に携わっていなかったので、昨年はどのように行っていたのか、あやふやな記憶を掘り起こしながら進めていきました。大学祭実行委員の仕事をしていくに当たって、実行委員会のメンバーはもちろんのこと、多くの友人、先輩、後輩、外部の方々、先生方、事務の方々、そのほかにも多くの方に支えられ、協力していただきました。途中で辞めたいと何度も思いましたが、皆の力があったあらこそ、ここまでやってくることができました。

人を動かしたり、交渉したりするのはとても大変でした。時間も待ってくれません。技術も経験もない私で、周囲の方には本当に迷惑かけっぱなしでした。今年は私がたくさん失敗したので、これを生かして、来年はもっと良い大学祭ができるだろうと思っています。

最後に、第７回の大学祭に関ってくださった方に、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

大いなるご提言を ー初の後援会懇談会ー

学生部長・学生委員会 鈴木　孝夫

開学以来初めての「後援会（保護者）懇談会」が10月8日㈯に開催されました。これまで後援会の皆様との接点は、入学式時の後援会総会、年１回発行される「後援会だより」、本学の広報パンフレット「活彩！保健大学だより」等を通じて、本学の現況や最新情報、年間の様々な行事・企画等を紹介するという本学からのお知らせのみでした。そこで、本学教員の生の声により、本学の教育方針や教育体制、各学科での指導状況、課外活動、そして学生生活や就職支援体制等をご理解いただく機会として設定致しました。後援会の皆様と膝を交えて親しく懇談することで、本学に対して率直な意見・要望をいただき、お子様に対する教育・生活支援の充実をより一層図ることができると確信しての実施でした。

司会進行の鈴木学生部長

当日は、事前申込みをはるかに上回る130名ほどのご出席、またご両親そろってのご参加のなか、大学からは新道学長の挨拶、各部局の説明と報告、人間総合科学科目ならびに３学科から具体的な内容報告、また、保護者の皆様からは多数ご意見・ご要望をいただきました。全体会終了後には申込みのあった24名の学生について個別面談を行い、学業、就職、大学生活全般について各学科の担当教員と熱心に相談や情報交換がなされました。

意見交換や懇談会への出欠席ハガキのアンケートでは、「成績や出席状況の保護者への連絡」、「低学年からの就職活動のアドバイス」、「本学広報のあり方」、「教育・生活環境の改善」等々の要望や提言、また多数の感謝やお礼の言葉もお寄せいただきました。終了後のアンケートには、「学生への支援体制を聞いて心強く感じた。」、「指導にあたる熱意、情熱が伝わりました。」「とてもきめ細かいケアが出来ていてビックリし、また安心できました。」という声がある一方、「一方的な会で学校の説明会を聞いているのと同じであった。」、「学年別、学科別に開催していただければ中身も違ったかも。」という苦言もいただきました。次年度の開催内容も含め、大学全体として直ちに対応できるもの、中長期的に対応していかなければならないものとして検討・改善していきたいと思います。

参加保護者の方々

お子様が青森県立保健大学において実りある豊かな大学生活を送り、保健医療福祉の専門職者としての素養をしっかりと身につけて立派な社会人として巣立っていけるように、保護者と大学が連携できる貴重な機会として大いにご活用いただくため、これからも毎年１回の開催を予定しています。今年度は大学祭初日に設定することにより、学生自ら作り上げた大学祭を直接目にして頂くことと、遠地のご父母の皆様に青森での生活振りをご覧になる良い機会といたしました。
次年度以降も、多くの保護者の皆様にご参加いただき、様々なご提言を心よりお待ちしております。

キャンプに参加して

看護学科2年 福田　麻千子

「健康と運動」の授業で９月の末にキャンプに参加しました。キャンプは、2泊3日で八甲田山を登り、十和田湖でカヌーをするという日程でした。参加する前に驚いたのは、参加する学生が６人ということでした。まさかそんなにも少ないとは思わず、正直困惑していました。

しかし、実際に参加してみると最初の心境とは明らかに変化しました。私たちは天候に恵まれたおかげで、山頂からの眺めやわずかに紅葉し始めた山々の景色を鮮明に見ることが出来ました。

私が中でも特に感動したのは、夜に見た空いっぱいに輝く星空でした。それは普段見ているものとはまったく比べ物にならないほど、綺麗な星空でした。これは、実際にキャンプに参加できた者だけの特権だと思いました。

十和田湖では湖のすぐそばにテントを張り、そこに1泊しました。それから、2～３人乗りのカヌーに乗ったりと楽しむことが出来ました。

今回キャンプに参加して、正直体力的には少し辛かったのですが、仲間との思い出が増えたことが一番よかったと思います。これから参加する機会がある人には、ぜひ体験してもらいたいと自信をもって勧める経験となりました。

上：十和田湖でテントを張ってキャンプした時の様子

下：カヌーに挑戦

テクニカルサークル

代表(看護学科2年) 高橋　大地

2005保健大大学祭にて

テクニカルサークルです。活動は主にダンス、ダブルダッチ、卓球、他みんながやりたいことは何でもやります。すごく自由なサークルです。今はストリートダンスを主にやっています。ジャンルは、ロック、ポップ、ヒップホップ、ブレイク、ジャズです。ダンスがわからなくても教えるし、みんな初心者なのでみんなで遊びながら覚えている感じです。このサークルは私が一年生の時に作ったサークルで、まだ新しいサークルです。今まで中央学院大学さんの学祭やもちろん保健大の学祭でも踊らせてもらいました。人に見てもらうのももちろんありますが、自分達ができないことをがんばってできるようになるというのが一番楽しいです。サークルのメンバーは三年生と二年生です。みんな他にもサークルをやっていてやりたい時にやるという軽いサークルです。今年はいろんなこともやりたいし、ダンスの方ではイベントにもどんどん出ようみたいな感じです。活動日は火曜日と木曜日です。いつも体育館でやっています。あと青森大学や中央学院のダンスサークルの人たちとも交流があり、いつも教えてもらっています。だから初心者でも大丈夫なわけです。

経験者はもちろん、やったことないけどやってみたいひとはぜひやってみましょう！楽しいサークルです！

高大連携事業について

学部長 佐藤　秀紀

今年度、保健大学と青森東高校との高大連携事業が開始された。背景には、青森東高校では、卒業生のかなりの人数が保健大学に進学しており、在校生も医療、福祉分野への志望者が多い、通学の利便性から、保健大学との連携について模索してきたことがある。趣旨として、大学における授業の進め方や学修の内容を実際に体験することにより、本学に対する理解を深め、高校生が大学の専門的な知識に直接触れ、多様な学問領域について興味関心を育む機会とした。今回、大学側と高校側の協議による計画に基づき、両者の協議・調整により、具体的内容を決定していった。

17年４月７日、「高大連携」事業開講式を実施。受講生は、２年次生16名（男子２名、女子14名）。生徒の受講科目は、「グローバル社会と文化」「医療人類学」「理学療法原論」「社会福祉学概論」の４講座で、一人１講座を受講とした。開講時間はいずれも６時限目（17：10～18：30）とし、高校の授業終了後に受講できるようにした。期間は４月から７月までとした。受講料は両校間の合意で無料とした。

17年８月９日、「高大連携」事業修了式を実施。

今年度の高大連携事業は、「取りあえずやってみる」という実現可能性を模索する試行段階であった。次年度以降、高校側の教育活動に定着した本格実施の段階に移行できうるものと考える。今後、高校と大学が連携の意義や目的、それぞれが抱える課題、ニーズなどの情報を共有化し、協議の過程で、学習内容に関する十分な調整を行っていくことが、重要な課題と言える。

教養教育における高大連携の意義と成果

人間総合科学科目講師　浅田　豊

本学３学科共通の人間総合科学科目第２年次配当の「グローバル社会と文化」に、青森東高等学校の２年生生徒２名が参加くださいました。科目責任者の立場で、高大連携実施元年における教育的意義と成果について、担当教員に寄せて下さった生徒さんからの実際の感想コメントに基づいて振り返ってみたいと思います。

第一に、「大学の授業を受け、価値観が変わった」という感想が見られました。これは、教育上大変注目すべき観点であります。即ちこれは、生徒さんたちが主体的に同科目の学習に取り組み、専門的知識にふれながらリベラルアーツへの動機づけを経て、幅広い教養を身に付けた証左であると筆者は捉えています。第二に、「世界についての考えが、さらに深まった」という感想は、異文化体験を含む高校までの既習知識と、本学でのグローバル社会と文化に関する新しい学びとの統合を裏付ける有意義なエビデンスの一つであると考えます。最後に、「大学生との交流が楽しかった」という感想は、大変率直なものだと受け止めています。それは、本学学生と東高校の生徒さんとの間のグループダイナミクスの高まりは、国際人としての資質の向上等をねらいとした講義の展開、つまり授業指導時間中に、十分に垣間見ることのできる光景であったからです。同時に、本学学生の、共同作業・連携のもとでの学習推進能力の高さや下級生へのサポート能力を改めて実感できました。次年度以降も同科目における高大連携の継続的実施を通して、また教育の質の向上や教養教育の評価・工夫・改善・見直し論議とも連動しながら、より良い高大連携の在り方を探りたいと考えます。

懇親会の様子

医療人類学；高校生を迎えて

看護学科教授 大関　信子

人間は産まれ、病み、死んでいく。これは人類が誕生してから現在に至るまで、地球上のすべての民族に言える普遍的真理である。医療人類学では、長い歴史の中で培われてきた民族ごとの生老病死の概念とケアのあり方を研究している。そこには、世界中の宗教や伝統的治療も含まれる。本学学生が学ぶ現代医学とその枠組みのなかで展開される看護は、医療人類学が扱う全治療体系の中ではほんの一部分にすぎない。医師は疾病をcureすることに全力を注ぐが、看護師は全宇宙体系の中でのケアリング、つまり、病む人が健康を回復し、出産や死を迎える場面では、その民族ごとの価値観を重要視したケアを提供することの重要性をたくさんの事例を用い学生とともに考えている。

また、1年前期ということで、東京大学の基礎教育で用いられている「知の技法」（小林康夫・船曳健夫編、東京大学出版会、1998）をテキストとして、学問とは何か、大学で学ぶとは何かを具体

的・実践的に指導し、学生に学ぶことの楽しさを体得してもらうことを最大の目標としている。

高校生を迎えるということで、思索を練った。学ぶ姿勢は高校生でも大学生でも同じである。学ぶ深さと目的が異なるだけである。この共通項を基に、高校生と大学生がペアを組んでテーマについてデイスカッションをしたり、発表したりする機会を毎回設定した。本学学生にとっても高校生からたくさんのことを学んだと思う。両者の相乗効果を高めることが教員の務めと考えた。

学問の事始めとして、高校生が学ぶ楽しさを体得し、そして、高校で学ぶことの中には一切の無駄がないこと、高校での知識が大学での学びの土台になることを理解してもらえることを高校生の学習目標とした。

高校生は本当にかわいい！毎週、学生さんの顔を見るのが本当に楽しみでした。これは本学の学生にとっても同じだったと思う。高大連携事業を企画・運営された方々に心よりお礼を申しあげたい。

高大連携授業の経験

理学療法学科教授 **伊藤　日出男**

理学療法学科の「理学療法原論」の授業で６人の高校生を受入れたので、科目責任者としての感想と今後の課題について述べてみたい。

①高校生は本学での授業以外に、授業に関連した自主的学習を行う時間はあったのだろうか。今年度の授業では学部学生と同様にグループ学習やレポート作成という課題を与えたが、今後は何らかの工夫が必要と思われた。

②高校生は共通して専門用語の理解に苦労していた。授業では教員が分りやすく説明してくれたと評価していたが、授業中や授業以外に研究室を訪れた生徒はいなかった。

③本授業では教科書を指定しているので、図書館に高校生のために教科書を５冊購入してもらった。高校生はグループ発表の準備のため本学図書館を利用していた。

④高校生の授業参加による本学学生への直接的な影響は見られなかったが、研究発表会では高校生がどんな発表をするか注目している様子が伺われた。

⑤高校生の単位認定は高校側に委ねられるので、担当教員は評価に役立つ資料を提出するだけでよいことになっている。しかし評価の基準は曖昧なので、これでいいのか疑問。高校側は単に大学の授業を体験させるというだけではなく、今後はもっと具体的な目的を示す必要があると思う。それによって教員側も授業の準備にあたることができる。

修了式

高校生と社会福祉学概論授業

社会福祉学科助教授 **増山　道康**

青森東高校生を対象とした高大連携事業として、社会福祉学概論では２名を受け入れた。感想の中で、高校生のレベルにあわせた授業だったと述べられているが、授業内容を易しくしたわけではない。むしろ、レポート課題や感想文等学生と同量の課題提出を求める等やや加重だったのではないかと危惧した場面もあった。

しかし、肯定的な感想につながったことについては、授業の工夫が実ったという感慨がある。

福祉の歴史や、人間の文化行動としての福祉という考え方を理解するための教材作成を行った。

例えば、五箇条のご誓文は、高校の歴史教科書に解説記述はあるが原文を示していない。「鰥寡孤独」（妻も身寄りもない男性、夫も身よりもいない女性、両親も身よりもない子供、身寄りにない独り暮らし老人）という原文を配布することで、福祉の歴史をより理解できるようになった。

また、シラバスについて最初に詳しく説明し、授業展開の理解に努めた。実際の授業もほぼシラバスに沿って進行できた。

このように、高校生の理解を助けることは、大学一年生の福祉の導入教育としても効果があったといえる。その点で、高大連携は、FDとして効果的であった。

今年度の教科書は、導入教育用テキストを選定したが、後期における福祉の各分野、領域に関する記述が多く、福祉の原理や歴史等総論部分はやや少ない。高校生の参加は前期だけであり、総論部分の授業を受けていることから、今後は、シラバスの工夫だけでなく、より読んで理解できる教科書の選定に努めたい。

日韓共同未来プロジェクトに参加して

理学療法学科3年 遠藤　寛子

国際親善の夜に

私は8月21日～27日に韓国で行われた日韓共同未来プロジェクトに参加しました。このプロジェクトは日韓両国首脳が2002年7月に開催された日韓ワールドカップ共同開催の成功と、その精神を後世に末永く語り継ぎ、継承する一環として実施することを合意し、3年前から開催されたもので、今回は日本の大学・専門学生100人と韓国の大学・専門学生100人が参加し、韓国国立中央青少年修練院という施設で共同生活を送りました。

韓国では日本人12人、韓国人12人の合計24人で1グループとなり、グループごとに活動しました。１日目は日本で韓国語講座や韓国での出し物の練習を行い、2日目に韓国へ出発し、修練院で韓国の学生からの歓迎を受けました。3日目には「日韓青少年の未来像」というテーマでの特別講義を聴き、午後には日韓伝統舞踊体験として、日本側からは阿波踊りとソーラン節を発表し、韓国の民族舞踊を踊りました。そして夕食後は体育館でグループ対抗の縄跳びやボール運びなどまるで運動会のようでした。まだ出会って間もない私達でしたが、「日韓交流」という同じ目的を持った仲間が集まっていたので、言葉の壁も乗り越えて、すぐに親密になることができました。４日目は韓国伝統文化体験として韓紙工芸、韓国の国弓を体験しました。５日目はソウル市内での文化体験に行きました。あいにくの天気でしたが、ソウル出身の学生が、市内を丁寧に案内してくれました。その日の夜は「国際親善の夜」として日本と韓国の学生が混ざり、グループごとに出し物を発表しました。韓国の学生が浴衣を着たり、日本の学生がチマチョゴリを着たり、誰が日本人か韓国人か分からないくらいでした。

韓国での生活の最終日、韓国民族村の見学と、独立記念館へ行きました。独立記念館では日本が韓国にしたことがリアルに描かれており、衝撃的な蝋人形などの展示もありました。私達はこの１週間、日本人と韓国人の区別がつくようにと、名札の中に国旗の印を付けていました。独立記念館で同じグループの日本人が中年の韓国人の女性に日本、日本人を否定するようなことを言われたそうです。その場にいた韓国の学生は「気にすることはない、昔のことだから」と彼女に言ったそうです。

その時私は韓国人が日本人に抱いている「反日」を実感し、本当にショックでした。現在、日韓交流は日本でも韓国でもスポーツを通してなど、小学生から大人まで、幅広く行われています。韓国人も過去の日本ではなく、現在の日本を見、日本人は過去に何があったかをしっかりと学び、現在の韓国と交流していき、その精神を語り継いでいく必要があると感じました。今回の参加で、私は日本人・韓国人含め、多くの友人を持つことができました。２ヶ月経った今でも、その交流は続いています。１週間という短い時間でしたが、これからの日韓交流のための貴重な体験ができたと思います。

独立記念館の噴水の前で

国際交流で得たもの

理学療法学科3年 森山　紋由美

私は今年８月、韓国仁濟大学校との国際交流のため２週間韓国へ行ってきました。仁濟大学校からの学生は、私たちが韓国へ行く以前に、青森での１ヶ月間の実習を終えていたので、私は彼らにまた会えるという楽しみな気持ちと、逆に韓国の病院で行う実習に対する不安な気持ちを胸に韓国へ旅立ちました。この２週間の国際交流の主な内容は９日間の病院実習でした。この病院実習はただの見学ではなく、実際に患者さんに対して運動療法を行ったり介助をしたりするものでした。また、日本ではあまり経験することのできない水治療法などを体験できることができ、自分の知識や経験を増やすことができる良い機会となりました。14日間の滞在のうち、９日間が病院実習というハードなスケジュールではありましたが、仁濟大学校の学生との交流もたくさんできました。毎日夕食を一緒に食べたり、有名な観光地へ連れて行ってくれたりしました。

韓国の習慣から、私たちはたくさんのもてなしを受けました。韓国では年上の人がおごるという習慣があり、このことに関して私たちはいつも戸惑っていました。

言語の問題はありましたが、一生懸命聞こうとすること、話そうとすることで私たちはお互いを理解できたと思います。この国際交流で私はたくさんの経験と思い出、そして友達を得ることができました。この経験を一生忘れることなく将来に活かしていき、また彼らとこれからもずっと連絡をとっていきたいです。

仁濟大学校の学生と慶州にて

仁濟大学釜山白病院での実習について

理学療法学科3年 齋藤　奈美

実習最終日に焼肉店の前で

私は今回の研修で９日間の病院実習を行いました。病院のPTの先生のご指導の下、また、ちょうど仁濟大学理学療法学科の３年生の学生が実習中であったため一緒に様々な事を学びました。学生には「痛くないですか？」「お疲れ様でした」「ペゴンパ」などのよく使う韓国語を教わり、病院ではそればっかり話していました。

最初の３日間は物理療法室、次の２日間が水治療法室、最後の４日間は運動療法室で実習を行いました。物理療法、水治療法は日本ではほとんど使われていません。きっと一生分を韓国で行えたと思います。運動療法室では患者さんとの交流もよい勉強になりました。言葉は通じなくても、コミュニケーションをとることができたのがよい経験となりました。

韓国では多くの方に支えられて毎日を生き抜いた事を忘れずにいたいです。本当にありがとうございました!!

大学でのWelcome party

第4期生の就職活動本番！

学生部長・就職対策委員長 鈴木　孝夫

４期生の就職活動もいよいよ本格化し、４年生は就職試験等に真剣に取り組んでいますが、本学では、就職対策として主に以下の事業を行っています。

１、第４回就職合同説明会の開催

※平成17年７月23日㈯　交流センター(食堂)

県内病院・社会福祉施設の人事担当者と学生（３・４年生）が直接面談して情報交換をする場を設定し、県内定着率の向上を目指して開催しており、今年度も３２事業所（２４病院・８福祉施設）と　県内就職希望の学生（約７０名）が参加しました。

２、面接・小論文試験対策

各学科の卒業研究担当教員及び人間総合科学科目教員等が中心となって、模擬面接、小論文添削、面接カード（エントリーシート）記載などについて、学生の個別指導を行うことにより、面接等に落ち着いて臨めるなどの効果が上がっています。

【4期生就職内定状況　単位：人】　H17.12.12現在

学　　科	卒業予定者	就職希望者	就職内定者
看護学科	１０６	１０２	６９
理学療法学科	２１	２１	１１
社会福祉学科	４４	３４	６
合　　計	１７１	１５７	８６

就職合同説明会

たくましさを実感して ー卒業生との懇談会ー

学生部長・就職対策委員長 鈴木　孝夫

昨年県内３市で開催した卒業生との初めての懇談会（県内在住者のみ対象）、今年度は、初の同窓会総会と懇親会の開催と期を一にして、大学祭初日にあたる10月８日㈯に本学において卒業生全員を対象として開催いたしました。参加予定の卒業生にとっては久しぶりの大学キャンパス、まして大学祭開催中とあり会場への出足は鈍く、十数名の参加、20分遅れでの開催となりました。

今年度の懇談会は内容を卒後研修的な講話と職場環境を話し合う自由懇談の二本立てとしました。講話は伊藤教育センター長（理学療法学科教授）から、「本学が目指す地域連携と学生教育」と題して、大学の最新トピックを交えてお話しいただきました。本学が目指し育成する人材とそのための教育カリキュラム、教育センター事業による具体的な地域連携、現代ＧＰ（16、17ページ参照）と本学授業科目の位置づけの三視点から、卒業生諸君が大学４年間に学んだカリキュラム内容を、社会人として改めて振り返って位置づけが出来るような内容でした。

引き続いて出席者の自己紹介とともに職場・職域の状況、悩みや意見を自由に出し合う懇談の場となりました。社会人としての視点から、本学実習生に対しては、実習の事前準備のあり方、一人ひとりのコミュニケーション能力の低下など。病院に対しては、看護師不足と看護の質の低下、チーム医療のあり方と連携の難しさなど。社会に対しては、医療圏の編成替えによる患者の痛み、肌で感じる患者の家庭状況、経済状況の現実など。そして自分自身に対しては、看護リーダーとしての技術、精神面での自己研鑽の必要性、理学療法士としてのチーム医療における自己の連携のあり方、ソーシャルワーカーとしての個々の事実・事例の普遍的な見方など、自分自身を客観的に捉えて分析する姿に学生時代の面影は微塵もなく、社会人としてたくましく成長した姿に只々感激しました。今後卒業生の活躍によって、本学の発展、本学への評価が飛躍的に向上することを大いに期待することができた一時でした。

出席者自己紹介の風景

看護師1年生

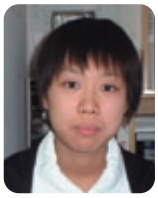
對馬　友英
（看護学科3期生）

重症心身障害児病棟に配属されて早６ヶ月を過ぎました。私の病棟では脳性麻痺の患者様が多く、言語的コミュニケーションはほとんどとれず、身体的障害があるために、自力では動けない患者様がほとんどです。その中で看護師は主に療養生活の援助、そして様々な合併症の予防・治療に対する援助をしています。

私が半年間で最も実感したことは、患者様の生活は看護師に委ねられているということでした。患者様自身の訴えが少ないために、患者様にとって何が苦痛か、今一番辛い症状は何かということを、看護師は患者様の表情やしぐさの変化などから観察できなければならないということが、私にとっては困難で、乗り越えることの出来ない壁でした。そんな時、助けをくれたのはプリセプターを中心とする病棟スタッフでした。病棟スタッフは患者様一人ひとりのサインの意味を理解しながら関わりをもっていました。そして戸惑っている私に対して、患者様の個別性を踏まえた関わり方を指導してくれました。半年経ち、まだ不安もありますが、当初よりは患者様の日々の変化を観察できるようになってきたと思います。

看護師としてはまだ駆け出しの１年生ですが、この半年間に感じた不安や緊張を忘れることなく、患者様とのコミュニケーション、スタッフ間のコミュニケーションを大切にしながら成長していきたいと思っています。

1年生のつぶやき



浜谷　美那子
（理学療法学科3期生）

病院に勤務し始めてからもう半年が経過しました。大学生の頃は自分の働いている姿など全く現実味のない想像でしたが、今ではつい半年前の大学生活が昔のことに思えます。

私の勤務している病院には多様な疾患の患者様が訪れ何科の病院であるのか時々分からなくなりますが（内科・神経内科です）、そんな職場の環境にもようやく慣れてきました。しかし仕事の場面では分からないことの多さに立ち尽くすことが多々あります。自分の勉強不足を振り返ったところで何か落ちているわけでもないので、とりあえず疾患名を聞くたびにあわあわと教科書を開き先輩方に助言を求める日々です。勉強の時間は確保でき各種研修会などにも参加させていただけるので、恵まれた環境の中で精進しています。

臨床に出て実習と何より違うのは、人の関わりの中に置かれて、しかも患者様の未来を一部でも背負っていることだと思います。普通の人間関係でそんなことを求められたら多分逃げますが、理学療法士としてなら課せられた責任から逃げることは出来ません。１年生だから気構えくらいはでかくと思ってつい大きなことを書いてしまいました。何はともあれそのことを肝に銘じて、言葉に値する人間になれるよう持てる力を注いでいこうと思っています。

2足の草鞋（わらじ）は…

小川　あゆみ
（社会福祉学科3期生）

私は、「おはようございます」とともに仕事を始め、「お疲れ様でした」の合図とともに学生となるといった日々を続けています。４月当初は仕事と学業とのリズムがつかめず随分戸惑うこともありましが、今は職場と大学の協力を得ながら、ようやくバランスが取れる毎日を過ごすことができるようになりました。

仕事は主に在宅介護支援センターのソーシャルワーカーとして、在宅で生活している方々の諸問題の相談を受け、日常生活の改善・向上を目的としたサービスをマネジメントするといった業務を行っています。個々に対する支援は、学生生活で学んだ（学んでいる）多くの知識と考察方法に基づき、更に洞察力と日々の経験を加味し取り組んでいくものですが、そのことは大学院においても人間福祉学を学んでいますので、実践を通して学びを深めていくことができます。又自分の見聞を広げていくことができる日常は充実し、更には自分自身の力となっていると実感できます。今後も仕事と学業とが刺激を与え合いながら、自身の向上を目指し更に地域の人々がより良い環境で生活できるよう微力ながら努めていきたいと考えています。

県内の看護職待望、認定看護管理者教育セカンドレベルを開講

セカンドレベル担当 早川　ひと美

青森県立保健大学健康科学教育センターは、地域貢献を目標に保健医療福祉の専門職者を対象にした研修の企画・実施等を機能としている。本学では、今年度より看護管理者を対象とした「青森県立保健大学健康科学教育センター認定看護管理者教育セカンドレベル」を開始した。セカンドレベルの教育は、日本看護協会が定める認定看護管理者制度における一つの教育課程であり、他にファーストレベル、サードレベルがある。サードレベルまでの全課程を修了するか、一定の要件を満たすことによって認定看護管理者の試験を受けることができ、青森県には4名、全国では196名の認定看護管理者が活躍している。これまでは青森県看護協会において、ファーストレベルが実施され、修了者は700名を超えていた。しかしセカンドレベルの受講のためには他県へ長期間出向くことが必要で、経済的にも時間的にも困難なことからセカンドレベルの修了者は少ないのが現状であった。医療を取り巻く環境の変化に対応するためにも、管理者としてさらに学習したいというファーストレベルの修了者や病院組織の看護部門長からのセカンドレベル県内開講に対する期待は大きく、今年度、本学において第1回の開講の運びとなった。期間は6月20日から9月2日まで、2回のインターバルをはさみ32日間、受講者は県外からの受講生を含む29名であった。セカンドレベル教育は４つの教科目からなり、講義と演習で構成されている。受講生は、県内外の専門分野における実践家や教育・研究者などからの講義を熱心に聞き積極的に質問をしたり、受講生同士でディスカッションを深めたりしていた。また演習においては時間外にもグループワークをするなど成人学習者として主体的に取り組み学習を深めていた。コース後半では、学習した内容を基に、受講生各自の組織改善計画についてプレゼンテーションが行なわれた。受講生が現場に戻って計画を実行することによって組織が改善され、看護ケアの質向上に貢献してくれることを期待したい。

ディベートの風景

救急看護認定看護師教育課程の紹介

主任教員 平尾　明美

認定看護師（Certified Expert Nurse）は、特定の看護分野で、熟練した看護技術と知識を用い水準の高い看護実践を行い、看護現場における看護ケアの広がりと質の向上を図ることを目的として、日本看護協会が1995年より開始した制度です。救急看護は、現在17分野ある領域の中でも初期から教育が行われていました。しかし，教育課程は10年近く日本看護協会教育研究センター(清瀬)1ヶ所のみでした。2005年より開講した県立保健大学は他の１ヶ所と全国で３ヶ所の教育機関となりました。それだけでなく認定の教育課程を大学が開講するのは大学教育機関としても先駆的です。

2005年度の受講生は、定員より多い11名で、6月～12月の6ヶ月間、開講してまいりました。救急看護概論、災害看護をはじめとする15科目390時間の講義、臨地実習を含む240時間の演習・実習にと計630時間は半年間でもまだまだ時間が足りないと感じる程の充実した教育内容でした。臨地実習では他施設で看護実践を行うという今まで経験のしたことのない感覚に戸惑いを覚えつつも受講生は互いに助け合い、切磋琢磨し学びを深めていました。県立保健大学の救急看護認定看護師教育課程では、根拠に基づいた看護（EBN）の実践と、自律的な行動力によって救急看護分野の質向上に寄与できる人材を育成することを目的に教育を行っています。北は青森、南は九州と救急看護に情熱を傾ける看護師が集まりました。ここ青森で学んだことを基に受講生たちは日本全国で活躍してくれるものと期待しています。

救急看護学会にも参加しました

修士論文中間発表会について

教務学生専門部会長 藤井　博英

中間発表の様子

平成17年度修士論文中間発表会が、10月13・14日の両日、教育研究Ｃ棟2階の研修室で行われた。中間発表会は、これまで研究を進めてきた修士課程2年生が、テーマや構成について教員をはじめとする他の人々から客観的に評価され、自己の凝り固まった考えや矛盾などを見直すことが目的である。特に構成や私見の立て方については、独りで書き進めている中で、極端に視野が狭まり、間違った方向に進んでもなかなか気づかないものである。その軌道修正を行える貴重な機会である。さらに、修士課程１年生は、自分の研究の構想に役に立ち、計画を立てる際の目安になる。また、全ての参加院生にとって質疑応答の練習の場、効果的なプレゼンテーションはどのようなものかを、体験的に学習する機会である。

本年は、両日併せて21名により発表が行われた。発表テーマは、ケアに関する研究、健康の維持・増進に関する研究、保健に関する研究などであった。健康科学研究科の多彩な分野と結びついており、人間と、健康・生活・保健・機能・リハビリテーションとのつながりの多様性が改めて感じられた。発表時間10分という短い中で、これまでの研究成果の内容を発表し、参加者からの質疑応答も活発に行われた。質問に答える院生も自らの考えを素直に述べ、教員や他の院生からのアドバイスや評価を真摯に受け止めており、次へのステップへとつなげていける大きな糧になったと確信している。

今回の発表で学んだこと、収穫したことを活かし、来年２月に予定されている研究成果の発表会では、効果的で満足のいくプレゼンテーション、そして発表成果をあげられることを期待している。残された時間を有効活用し、修士論文完成に向けての追い込みをかけ、最後まで頑張ってもらいたいと思う。また、院生には、自らの研究を発展させ、保健大学の発展に寄与し、更には保健・医療・福祉の発展に寄与する者が誕生してもらいたいということも併せて願う。

大学院生活での学び

博士前期課程2年 八嶋　三由紀

私は、平成16年に本学修士課程の第２回生として大学院生活をスタートさせました。本学の修士課程は、保健医療福祉の高度専門職業人の育成を主な目的としており、学部を卒業してすぐに進学した人から、臨床や教育、行政等の様々な現場で活躍していた人など、様々な経歴を持つ学生が学んでいます。私自身、長い臨床経験後の学生生活であり、現場を離れることへの不安と期待の入り混じった大学院生活のスタートでした。

大学院での授業は、それぞれの専門領域での高度な知識・技術の習得のために、各分野の先生方とのディスカッションが中心であり、ディスカッションを通して多くの学びがあります。人に対して自分の考えを伝えるためには、自分自身の考えを論理的に表現する必要があり、大学院での授業はそのための有意義な経験となりました。また、様々な経歴を持つ学生間のディスカッションからも刺激を受け、ひとつの事柄を多面的に捉えることができること等を他の学生から学ぶことができ、大学院生活を通し生涯の友人を得ることができました。

さらに、これらの学びの中で修士課程の学生として、研究者としての視点を身につけることができたと考えます。学生は、それぞれの分野において様々な研究課題を見出し、その課題について研究的視点で取り組むことの重要性を学びます。そして、卒業後はその経験を生かし、現場にフィードバックさせることで、高度専門職業人として更なる活躍ができると考えます。今後は、修士論文作成に向けたラストスパートに向け努力をしていきます。

学生間のディスカッションの様子

文部科学省　現代GP採択
テーマ『下北地域を元気にする学生参画型教育』

副学長・地域貢献委員長
中村　惠子

県立保健大学では平成15年度に文部科学省が教育における競争的資金の助成を開始したときから、毎年申請を実施してきました。その結果、平成16年度は、「海外先進教育研究実践支援プログラム」で１件採択され、３ケ月間アメリカにて研究・研修を積んでまいりました。本年度は現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代ＧＰ）が採択され４年間（平成17年から20年）継続的に教育を進めることになりました。現代ＧＰを含め文部科学省の競争的資金で認められた助成金は全額補助で進めることになります。

現代ＧＰと言う本教育事業は、文部科学省が各種の審議会等から出された提言等、社会的要請の強い政策課題に対応したテーマを設定し、各大学から応募された取り組みから、特に優れた取り組み（教育プロジェクト）を選定し、財政支援を行うことで、高等教育の活性化が促進されることを目的とするものです。

採択された現代ＧＰは保健大学の基本理念に基づき、大学がこれまで下北地域で行ってきました教育・研究・研修活動がその基盤になっています。『下北地域を元気にする学生参画型教育』が今回採択されたテーマです。学生参画型教育は、看護・理学療法・社会福祉学科の１年次から４年次までの学生が下北地域をフィールドとして、演習や実習を主体的な学習活動によって行います。下北地域の現場での学びは、地域における包括ケアへの参画など机上学習と異なり、現実の問題を実感しながら、知識、技術、情報、資源を活用し、他の専門職と協働しながら解決への方略を学んで参ります。このような実践型の学習活動は、学生の保健医療福祉への関心を高揚させることと、十分な保健医療福祉の人材が置かれていない地域において活動できる主体力・実践力、創造力を育み、過疎地域において活動できる人材育成に寄与できるものと確信しています。

現代ＧＰパンフ

現代ＧＰとしての学部教育４年間の枠組みで主な科目は、１年次の「保健福祉概論」２・３年次の各学科専門科目演習「理学療法学科の初期総合実習」や「看護学科のリハビリテーションケア」など、４年次の「ケアマネジメント論演習」です。これらの教育を支えるためにサテライト拠点『下北地域センター』や『テレビ会議システム』あるいは『教員による教育研究活動』があります。

サテライト拠点、青森県立保健大学下北地域センターは、①学生と地域住民との交流・教育・支援活動の場、②地域の機関や組織との連携や会議の場、③専門職者支援の場、④フィールドワークの調整の場、⑤研究・研修事業の推進や調整の場、としての機能をもって活動したいと考えています。ただ今は駐在員を配置しながら、その準備を整えています。どうぞ楽しみにしてください。

テレビ会議システムは、大学と下北地域センターを中心に、むつリハビリテーション病院、むつ総合病院、大間病院など６ケ所の設置を予定しています。大学から約100㎞の遠隔にある地区と結んで、学生の教育はもちろん、専門職者の研修や情報発信、情報収集、住民の相談などが可能と考えています。

地域貢献に繋がる教員の教育研究活動は、開学以来、過疎化の著しい下北地域において教育研究活動を実施してきました。例えば「健康寿命アップ」プロジェクトとして地域の住民に対する健康教育は、その地区の健康への住民活動への寄与、あるいは専門職者への研修活動や専門職支援活動によって、地域の方々の健康管理への貢献などが挙げられます。このような活動は今回の現代ＧＰへの申請に大きな実績としてあげることができます。

次に平成17年度の実際の活動についてご紹介致します。

11月：下北地域センター開所式
　　下北地域における教育研究活動推進会議
　　ケアマネジメント論実習

下北地域センターを設置し、11月4日にその開

所式を実施しました。

開所式

開所式に続いて「下北地域における教育研究活動の推進会議を開催致しました。開所式・推進会議には県議会議員の方々やむつ下北医師会長さま初め約70名のご参加を頂きました。推進会議では下北地方健康福祉こどもセンター齋藤和子保健部長に「保健所として青森県立保健大学に期待すること」と題した講話を頂きました。続いて第２部は、①下北地域を元気にする学生参画型教育（伊藤日出男教授）②橋渡し看護（上泉和子教授）③健康寿命アップ（嵯峨井勝教授）④地域リハビリテーション（川口徹助教授）⑤専門職研修（石鍋圭子教授）のプレゼンテーションと参加者による意見交換を行いました。

推進会議

また、ケアマネジメント論演習は本事業初めて学生が下北地域にて２泊３日の演習授業を実施致しました。下北地域での学習について、学生の評価は総じて良い評価でした。しかし、採択されてから準備する時間的な猶予期間が少なく、授業準備の不備な点が指摘されていましたが、次年度以降は万全の準備ができると思います。（文部科学省からの通達で補助金が交付されるまで、本事業として実行することができませんでしたから、時間割に組みこまれている演習の遂行に多少の無理が生じたものと考えています）

平成17年度の今後の予定は、

12月：テレビ会議システムを用いた「ケアマネジメント論演習」反省会・評価会

平成18年１月：初期総合臨床実習（理学療法学科３年生）、リハビリテーションケア（看護学科3年生）

２月：保健福祉概論／次年度生のフィールドワークの準備として下北地域にてシミュレーション

３月：現代ＧＰ推進講演会（3月7日、8日予定）

第３回下北地域における教育研究推進会議

さらに次年度以降の予定は、次のとおりです。

18年度は1年生全員が下北地域にて「保健福祉概論」の演習、４年生は２泊３日のケアマネジメント論演習」その他によって、下北地域の包括ケア事業に参画し、包括ケアの実際やその成果を学習します。さらに、下北地域センターを活用した相談事業や支援事業を進めてまいります。

19年度は各学年の演習・実習を前年度同様に推進する他、下北地域センターや各コミュニティにおいて学生による健康教室の開催など、地域住民とのふれあいを進め、住民と若い学生との接点を持ちつつ、学生の元気を受け取ってもらえるような、生活支援を考えていきたいと思っています。

20年度は上記の事業を推進しながら、本取り組みの成果を地域住民へ還元する公開報告会を開催する予定です。また、地域活性化を目標にした実践型ヘルスケアマネジメント教育プログラムの開発を目指しています。

このように学生の教育活動を中心にした現代ＧＰは４年間の計画で進めますが、現代ＧＰに関して、またそれ以外のことでも結構です。地域の皆様と共に発展することを掲げて、地域貢献を推進する県立保健大学への要望やご意見等をお寄せ頂ければ幸いです。

第25回 日本看護科学学会学術集会

大会長　新道　幸恵

日本看護科学学会の学術集会は、発足時より、12月の第１週目の木曜日から土曜日の間の2日間に開催されてきました。しかし、青森ではそのころは降雪の時期。積雪のない生活をしている地方の人々には、雪道を歩くことは難しく、何かと不都合が起きるのではないかとの予測のもとに会期を２週間早めました。しかし、そのことで、企画の段階で、演題が例年通り集まるか、参加者数が予測通り集まるかなどの心配を開会日まですることになりました。しかし、演題数は一般口演及び示説発表、交流集会を含めて例年通りの約400題が集まり、関係者一同幸先として喜んだものです。ところが、開催日前から霙(みぞれ)混じりの雪が降り始めて、前日、当日、２日目と空の便が乱れ、参加者に大きな不便をかけることになりました。気候の予測は見事にはずれてしまいましたが、参加した方々は、学会のプログラムを楽しみ、積極的に参加され、良い学会であったとの感想を多くの方々からいただきました。メインテーマを「いのちに向き合う看護ーヒューマンケアにおける看護科学の挑戦ー」として招聘講演に「遺伝看護のイノベーション：研究と実践」、教育講演として「災害と人々の健康と看護」、シンポジウムに「いのちを支える先駆的看護実践」、市民フォーラムに「いのちを看まもる」など、メインテーマにつながるプログラムを組みました。その他に研究や看護実践における今日的な話題として「産官学連携研究と地域貢献」と「動き続ける看護の場ー政策と看護の連動ー」をシンポジウムのテーマとしました。

会場を青森市文化会館の全館及びホテル青森の３階の会場を借り切って、13会場を使用しての２日間のプログラムを無事終了させることが出来安堵しているところです。この成果は、本学の看護学科教員を中心に東北地方の看護系大学の教員から成る企画委員の皆様、青森県内の大学や看護専門学校、病院や診療所、老人保健施設に勤務されている看護職の皆様からなる実行委員、本学の看護学科の卒業生や在校生によるボランティアの皆様方の多大なるお骨折りと積極的で誠意と熱意のこもったご尽力によるものです。また、本学事務局の皆様にも色々とご支援頂きました。この場を借りて心から御礼申し上げます。

感動の「地球のステージ1」

国際科委員 千葉　たか子

平成17年10月10日(月)、健康科学教育センター・国際科の企画で「地球のステージ１」を開催しました。このステージは、山形県の精神科医である桑山紀彦氏が、世界中を歩いた記録で、ライブ音楽と大画面の映像、写真、そして語りが融合した大ステージです。「素晴らしいステージだ」という前評判に、「本学でも開催したい、学生に是非見て欲しい」と2年間の思いを込めた企画でした。

「世界5大陸の最高峰を見る」という夢から始まった世界52カ国への旅。ケニア、ソマリア、インド、フィリピン、中国、東ティモール、ユーゴスラビアなど貧しい国々や紛争で破壊された国々が実況中継さながらに映し出され、臨場感を高めます。「大人は破壊する。子どもたちは作り出す。」貧困と破壊の有り様が衝撃的です。それでもあまり悲惨さを感じさせないのは、明るい希望を感じさせる子どもたちの輝く目を見たからでしょうか。先進国の人間がとかく見下しがちな途上国の人々は、決していやしく惨めな人々ではなく、むしろ誇り高い人々であるということ、人を大切に思う心やもてなしの心をもっている人々であることを教えてくれました。

広報が弱かったために、聞きに来てくれる方は少ないだろうという予想はありました。でも聞きに来てくれた方は、きっと感動してくれるという確信がありました。そして、その通りでした。「素晴らしいステージだった」「久々の感動だった」「来て良かった」との声を頂きました。「頭で考える世界」ではなく、「心で感じる世界」と表現してくれた学生もいました。嬉しい限りです。

今回のステージは第一部だったのですが、終了後のアンケートには、「是非、第二部もやって欲しい」「必ず見に来る」という熱烈な希望が書かれていました。ライブ後もサインの願いにきさくに応じてくれ、帰る時、車の中から見えなくなるまでいつまでも手を振ってくれる桑山氏でした。

ステージで演奏する桑山紀彦氏

第5回「ケアマネジメントフォーラムin青森」を終えて

社会福祉学科教授 大山　博史

青森県では、依然として自殺率の高い状況が続いており、とりわけ高齢者自殺問題は未解決のまま残されています。ところで、2005年の介護保険制度において地域支援事業が創設されました。これは、要支援・要介護以外の被保険者に対して、新たな介護予防を実施しようとするものです。介護予防の柱には、筋力向上や認知症予防と並んでうつ予防がありますが、うつ予防の大きな目的の一つに高齢者自殺予防が含まれています。

地域支援事業では、実施責任の主体が市町村に定められており、地域で高齢者の心の健康を支える準備が整いつつあります。現時点の課題は、高齢者のうつ・自殺予防を地域でどのように展開するか、という点にあります。このような状況を受けて、「地域で支えるこころの健康」をテーマに、第5回ケアマネジメントフォーラムin青森が開催されました。

まず、私の方からは、基調講演において、高齢者のうつ病と自殺の関連についてお話しさせていただきました。高齢者自殺事例の大半は、直前にうつ病に罹患しており、また、社会的孤立に陥っていること、一般医を受療していることを心理行動面の特徴として挙げました。最近、北東北を中心に高齢者自殺予防のための地域介入が実施されており、介入の結果、自殺率が有意に低減することがわかってきました。介入プログラムは、①うつ病スクリーニングとフォローアップ、②高齢者集団援助・訪問、③うつ病に関する健康教育と自殺予防の啓発を主要な柱とすることを紹介しました。

シンポジウムでは、はじめに、名川町保健師の根市恵子氏から、同町の高齢者自殺予防活動の紹介がなされました。うつ病スクリーニング、高齢者集団援助・訪問とうつ病に関する健康教育を柱に実施しており、集団援助には「いきいきふれあい活動事業」を活用していること、また、認知行動療法を取り入れたピアカウンセリングを試みていること、自殺の三次予防活動として、自殺遺族への訪問サポートを実施していることが報告されました。

次いで、青森県立精神保健福祉センター所長の渡邉直樹氏から、秋田県（旧）由利町の高齢者自殺予防活動の事例が紹介されました。同町はうつ病スクリーニングを行わずに、高齢者集団援助・訪問とうつ病健康教育を中心とするポピュレーション・ストラテジーによって高齢女性の自殺率減少に成功しました。さらに、青森県内市町村の取り組みの現状を説明していただきました。本県では、現在、（旧）15市町村が自殺予防に取り組んでおり、多くは啓発・健康教育を中心とする一次予防活動が主体であること、一部の市町村では二次予防としてうつ病スクリーニングを実施しています。特異な活動として、自殺のハイリスク群に対して、一般医療機関の看護師が相談に応じる「こころのケアナース事業」の紹介がありました。

最後に、本学社会福祉学科教授の渡邉洋一氏より、地域福祉活動としての「見守り活動」の中で、高齢者のうつ・自殺予防活動を捉える視点が述べられました。高齢者が閉じこもることなく安心して暮らせるまちづくりを実践するためには、公的なシステムのみならず住民自身の相互支援が必要であり、その基礎として、バリアフリーの実現、市民活動・ボランティア活動の醸成、生き甲斐確保が必要です。「共に生きる・共に育つ・共に死ぬ」ことを可能とする地域社会を創り出すという認識が、見守りのための医療・保健・福祉の協働システムには不可欠となります。その上で、社会福祉協議会、民生委員、自治会、保健福祉センター、その他の関係機関の連携が例示され、併せて地域包括支援センターへの期待が述べられました。

ディスカッションでは、自殺予防プログラムの各要素について、幅広い立場から議論がなされました。紙芝居や絵はがきを用いた健康教育が「物語」としての効用をもつこと、中学生に対する啓発・教育の進め方、公民館活動の活用、地域福祉専門家によるアウトリーチの効用などについて、保健・医療・福祉の双方の立場からの意見が出されました。活動の効果を得ることはいうまでもなく重要ですが、活動の過程自体が効果に大きく影響を及ぼすこと、そして、活動実践自体に福祉的意義があることがあらためて確認されました。

今回のフォーラムをとおして、介護予防の一端を担う高齢者自殺予防活動が、保健・福祉の連携のもとで実践する意義が、さらに明確になりました。

10代の性研究会　代表 新道　幸惠

「10代の性研究会」は約3年前の平成15年1月に発足し、平成15年度に採択された厚生労働科学研究「10代の女性の人工妊娠中絶減少に向けての支援モデルの構築」に関する研究に取り組んでいます。メンバーは、本学教員、産婦人科医師、地域で活動する助産師や性教育に携わっている専門職からなり、最初は11名でスタートしており、現在は14名となっています。平成15年度から17年度に取り組んだ研究会の主な活動は、①青森県内の10代の性行動や性意識の実態に関するアンケート調査、②青森県内での性教育の実践、③ピアカウンセラーの育成と支援、④電話相談の開設と相談員の育成、⑤10代妊産婦を対象とした母親学級（エクササイズ）の開設、⑥関係機関や保護者との懇談会の開催等です。

研究結果のうちの、10代男女の性意識や性行動に関する調査結果は、県行政および関係機関・保護者への実態報告等に活用されると同時に、性教育の必要性や方向性を示唆するものともなり、大変貴重なデータが得られたと実感しています。ピアカウンセラーの育成の結果、SMILEグループが発足し、年々活動の幅を広げており、大学内や市内のアウガ、高校などで活動実績を得て、関係者からの評価が得られています。また、青森市内を主とした性教育に関する関係機関や関係者との懇談会及びワークショップなどの開催等による３年間の研究成果の公表は、関係者の間に、10代の性行動に関する課題について積極的な取り組みを継続的に行える組織の発足を望む声へとつながりました。そこで、今後、研究会としての活動によって、性教育における関係機関の連携システムの構築を行い、実質的な活動の継続を検討しています。

「10代の性ワークショップ」会場の様子

公開講座実施報告

本学では、平成11年開学以来、毎年公開講座を実施しています。今年度も、「生活と健康」をテーマに、以下のとおり開催しました。

今年度からは、本学講堂で実施している４回の講座以外に、下北地域への重点的な地域貢献の一環として、８月27日㈯に「下北地域における公開講座」を実施しました。平成17年度は「下北地域」を含めた５回の講座で、延べ1,306名の方が受講されました。

≪第１回目　６月４日（土曜日）≫
① うつ病－ありふれた病気だがこじらせると大事に－
講師：藤井　博英（看護学科教授）
② 正しい判断と問題解決の方法－クリティカルシンキングとその技法－
講師：増山　道康（社会福祉学科助教授）

≪第２回目　６月１８日（土曜日）≫
① 高齢者の虐待問題を考える－青森県の高齢者虐待の実態から－
講師：大和田　猛（社会福祉学科教授）
② 福祉用具を上手に使うには～介護保険で使用できるものに焦点をあてて～
講師：原田　光子（看護学科助教授）

≪第３回目　７月２日（土曜日）≫
① オリンピックとスポーツ医学
講師：成田　寛志（理学療法学科教授）
②認知症（痴呆）とともに生きる人々への支援～認知症（痴呆）を正しく理解しよう～
講師：吹田　夕起子（看護学科講師）

≪第４回目　７月１６日（土曜日）≫
① 食生活から健康づくり～本学健康科学研究センター研究を中心に～
講師：藤田　修三（人間総合科学科目教授）
② 排泄の障害とケアー健康を維持するための排泄コントロールー
講師：藤田　あけみ（看護学科講師）

≪下北地域　８月２７日（土曜日）≫
① 心疾患、脳卒中、がんを予防するために
講師：嵯峨井　勝（人間総合科学科目教授）
② うつ病－ありふれた病気だがこじらせると大事に－
講師：藤井　博英（看護学科教授）

「下北地域における公開講座」会場の様子

「障害をもって生きる～医療識者へ望みたいこと～」　講師：四戸　龍英氏

◇日　時：平成17年7月25日(月)6限目

障害をもつ人の国際的スポーツ大会であるパラリンピック、シドニーやアテネではオリンピックに負けないスポーツエリート達が活躍しました。そうした選手のお一人が野辺地町在住の講師です。四戸氏は、19歳の時に事故で脊髄損傷となり、以後車いす生活を続けてこられました。今から30年前のことですが、幸いに東北労災病院の専門リハビリを受け、最短の入院で社会復帰しました。その後、33歳でチェアスキーを始め、1988年インスブルックパラリンピックからソルトレーク大会まで５大会連続出場し、優秀な成績を残しています。現在は車いすや介護用品の会社代表取締役の傍ら、障害者スポーツ協会理事としても活躍されています。受傷からリハビリの様子、スポーツ選手として精進する中で自己の健康管理に厳しくなったこと、家族や周囲のサポートが助けになったことなどを話されましたが、聴衆にとって何よりも印象的だったのは、障害者自身が自立することへの厳しい指摘と要望でした。それは、人生に対する前向きな姿勢と苦難を乗り越えてきた人の誇りに裏打ちされて心に響き、学生にとっては今後の医療者としての在り方を考えさせるものであったと思います。

（文責：看護学科長　石鍋　圭子）

平成17年度特別講義について　講師：長田　乾氏

理学療法学科では、秋田県立脳血管研究センター神経内科部長　長田 乾（ながたけん）先生を講師として招聘し、7月6日特別講義を開催しました。

長田先生は、脳卒中の診療と研究の第一線で長年活躍され、国際学会の事務局も担当されています。今回「脳血管障害の病態と機能回復のメカニズム」について、豊富な症例を呈示しながら、わかりやすく解説されました。また、ほぼ全ての脳卒中患者が登録されている、秋田県における詳細な脳卒中疫学データに基づいて、センター開設から20年の間に、脳出血が少なくなり、若年発症の患者が激減したこと、脳卒中死亡率が低下したことを示されました。これは、まさしく塩分制限の奨励と高血圧の予防・治療という保健医療活動の成果と考えられます。

さらに脳卒中は早朝や夜に発症する頻度が高いので、24時間体制の診療が必要不可欠であること、救急隊の連絡から治療開始までの時間を短縮するように、病院を挙げて日々努力していることも述べられました。また迅速な手術治療（クモ膜下出血など）や回復促進のための早期リハビリを含む“レベルの高い診療”を進めていくためには、放射線科医、神経内科医、脳外科医、理学療法士、看護師が一体となったチーム医療が重要であることを指摘されました。

このような秋田県における進歩した脳卒中診療が、青森県よりも10～15年先んじていると感じたのは、私一人ではないでしょう。学術的にも、保健医療行政の面でもインパクトの大きな講義でした。　（文責：理学療法学科長　尾崎　勇）

知的障害者施設におけるソーシャルワーカーのあり方　講師：辻村　博隆氏

平成17年度社会福祉学科特別講義は、去る10月12日15時40分より17時まで、B棟１階117教室において、知的障害児施設「青森県立八甲学園」の次長兼総務課長である、辻村博隆（つじむら・ひろたか）氏をお招きして、「知的障害者施設とソーシャルワーカー」というテーマでお話をいただいた。

講師の辻村博隆氏

辻村先生は青森県すこやか福祉事業団が所管する福祉施設の概要を紹介した後、知的障害児(者)に対する地域住民の差別や偏見に対して職員がどのように関わってきたか、という苦難の経過を述べられ、障害のある人とない人が共に暮らせる地域社会を構築するために施設やソーシャルワーカーの役割を熱意を持って訴えられ、ソーシャルワーカーとは利用者支援に関わる多様な機能を果たし、利用者の自己実現を図ること、であると力説された。また、ソーシャルワーク実践にとって自己覚知の重要性とチームワークの大切さを学生に主張された。

辻村先生は青森県すこやか福祉事業団の知的障害者福祉センター「なつどまり」や養護老人ホーム「安生園」などにも勤務経験をお持ちであり、施設に勤務する、いわゆるレジデンシャルソーシャルワーカーのあり方について、実践的経験を踏まえて意味深いご講演をいただいた。

社会福祉学科の１年次から４年次までの学生が多数参加し、質疑応答なども活発に行われ、社会福祉専門職を目指す学生にとっては、有益な示唆が得られたことと思われる。

（文責：社会福祉学科長　大和田　猛）

健康日本21から健康フロンティアへ　講師：渡邊　昌氏

11月29日、国立健康・栄養研究所理事長の渡邊　昌先生をお招きして表記タイトルの特別講義を開催しました、渡邊先生は、病理学者として研究生活をはじめられ、米国留学後は国立がんセンターで病理室長、疫学部長を歴任されました。その間の激務による運動不足と美食がたたり糖尿病をわずらわれましたが、薬を使わないで、大変な努力の末に糖尿病のコントロールに成功し、その体験を本にされ大変な反響を呼んだ方です。

この特別講義の内容は、主にがんと糖尿病の発症の原因、メカニズムおよび罹患に係わる統計などについてふれられ、その一次予防の重要性を強調されました。学生は、これまで見たことも無いがんや糖尿病合併症の生々しい病理写真や、三島由紀夫の解剖の話など、日頃は聞くことの出来ない話とユーモラスな話に真剣に聞き入っていました。渡邊先生もあんなに大勢の講義なのに、皆さん熱心に聴いていたことに大変感激しておられました。（文責：人間総合科学科目教授　嵯峨井　勝）

地域の保健医療福祉の実践力の向上を期して

研修科長 渡邉　洋一

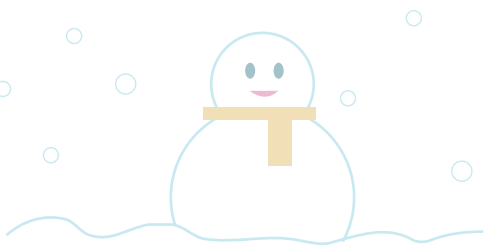
本学では、地域での保健・医療・福祉の連携を図るために各種研修の実施や、教員の教育活動の向上を目的として、健康科学教育センターの研修科が設置されています。その事業内容について紹介します。

当研修科では平成17年度には、教育改善事業として５件の申請を採択し教員の教育活動を支援し、研修企画事業に対しては、「介護職のための家庭支援研修」「栄養士の役割研修」「社会福祉機関新任職員実務研修」「リンパ浮腫ケア研修」の4件を採用して研修を事業することとしました。

また、第五回目を迎えた「ケアマネジメントフォーラム in 青森」では、介護予防事業の開始にむけて、「地域で支えるこころの健康」をテーマにして、県内の保健医療福祉の関係者と本学の教員・学生が参加して開催されました。また、知的財産保護について、関係者の専門研修会を開催して「特許権」をめぐる知的財産と研究との課題や取り組みについて研修しました。

その他の研修科事業としては、保健医療福祉の啓発のためにブックレット「健康と生活シリーズ」の作成を予定しています。あわせて、現代ＧＰの事業と協働して、下北地域での「こころの健康」の出前型研修会や講座の開催を予定しています。

このような研修科事業は、青森県内の保健医療福祉の関係者の連携と研鑽の場として企画され、本学の地域貢献事業として取り組まれています。人口減少社会にむけて、本県の生活課題も多岐・複雑となっており、本学の取り組みの強化を図りたいと思います。ご協力をお願い申しあげます。



平成17年度国際科活動をふりかえって

国際科長リボウィッツ志村よし子

今年度の国際科のプロジェクトの活動も、残り少なくなりました。①仁濟大学、ベレノバ大学との学際交流、②職員の英語増進プロジェクト、学際・地域交流としての ③エール大学教授の招聘、④地球のステージ、地域交流としての ⑤ＪＩＣＡ青年招聘事業、⑥ＪＩＣＡ地球市民講座、⑦英語科出張交流、⑧国際科学生ボランティア活動などがあげられます。また国際科の将来を企画するシステム構築委員会は、平成20年の独法化にむけ、中期目標の「国際交流の拡大」について熱心に検討し模索してきました。

さて来年度は、社会福祉学科と看護学科も仁濟大学との交流を踏まえ、１月に韓国訪問を予定しています。本学で学んだ仁濟大学生の中には、本学で大学院を希望している学生もあります。ベレノバ大学とは、９月に看護学長と今後の交流について話し合いました。いよいよ来年は、本学から３名の大学院生がベレノバ大学での研修を予定しています。新道学長との協定式も３月にアメリカで計画しております。国際交流に関して学生の意見が反映され、また国際科の運営に参画できるシステムを構築したいと思っております。

地域連携としては、青森市国際交流ボランティア協会や青い森未来財団の方々等、ＮＧＯ団体が活躍しており、15年間近くフィリピンとの国際交流を精力的に進めておられる方もあります。このような地域の方々と連携して大学が果たす役割についても、検討してゆきたいと思います。

本学においては、国際交流の歴史が浅いため積極的に開発しシステムを構築することが求められています。真の国際交流とは何か模索しながら

１）外国の大学との教育研究拡大
２）学部･大学院生の留学支援
３）外国からの学生･研修生の受け入れ
４）国際交流に係る地域社会との連携

等を中期目標にあげシステムの構築に力を注ぐ予定です。ご協力くださった教職員・学生方に心から感謝いたします。これからも国際科を応援してください！

ベレノバ大学フィッツ・パトリック看護学長とリボウィッツ教授

秋の園遊会

天皇皇后両陛下が主催される秋の園遊会が、平成17年10月27日に東京元赤坂の赤坂御苑で開催されました。今年度は、本学の新道幸惠学長が、招待を受け出席されました。園遊会では、産業、文化、芸術、社会事業などの、各界功労者が招待を受けます。

学生相談の充実　カウンセラー(臨床心理士)が配置されました

学生相談専門部会・保健嘱託員 竹浪　幸子

現代は、誰でもが悩みや問題を抱えている社会であり、日々心の健康『メンタルヘルス』が問われています。（メンタルヘルスというと何か特別のことのように捉えられる感もありますが、予防する、維持増進するという意味合いが強いものです。）

本学では、入学時の宿泊研修、ガイダンス、健康診断、学生活動、就職支援等あらゆる機会を通して学生のメンタルヘルスの向上に努めています。たくさんの新しい出会いや体験は、喜びとともに緊張感も生じ、心身の調和を崩す学生もおりますが、多くは授業や実習の中で、ともに語り合う仲間や教職員との人間的交流を通して乗り越えているようにみえます。本学の学生は、学びの目的意識が明確なこと、専門性からくる知識や技術が自己管理力を培っているといっていいでしょう。

保健室の利用状況からみますと、けが等の救急処置は少なく、相談に訪れる学生の方が多くなっています。相談内容は、自分の心身のこと、家族や友人のこと、学習や進路のこと、日常生活のことなど様々で、一緒に具体的対処方法を考えたり、適切な相談機関を紹介するなどしています。

ところで、自分のことを話すことに慣れない人もいると思いますが、相談という直接的な対話は、思考を練り直したり、今まで構築された上にもう一段もう一段と積み重ね、視点を高くすることで、未見の自分に出会うきっかけになるでしょう。同じ景色を見るのでも、１階と４階では異なるように。

その意味において、「相談するという行動」は、積極的なものであり、この体験は人と向き合う専門職としてのヒューマンケア能力を高めていくことに繋がると思います。また、メンタルヘルスの基盤は、からだ（食・睡眠などの生活習慣）にあることも忘れないでいただきたいと思います。

本学では、平成15年度から産婦人科医による女性特有の悩み相談を設け、女子学生をサポートしていますが、今年度から月２回カウンセラーも配置し、一層の支援充実を図っています。悩み事はもちろん、ちょっと話したいことなどありましたら、気軽な気持ちで利用してください。

保健室相談は随時、カウンセラーへの相談・産婦人科医相談は、保健室での予約となっております。

カウンセラーの浅原奈苗さんから

みなさんこんにちは。カウンセラーの浅原奈苗です。
カウンセラーはみなさんのよりよい学生生活のために、人間的サポート や心の健康づくりのお手伝いをしています。対人関係や恋愛で悩んでいる、自分の性格を変えたい、気分をコントロールしたい、拒食や過食で困っている、将来に不安がある等どんな心の悩みでもお聴きします。一人でも友達と一緒でもかまいませんのでお気軽にご利用ください。
なお、秘密は固く守られますので安心して来てみてください。

人　事　異　動　の　お　知　ら　せ

＜新任紹介＞ (H17.10.1付)

理学療法学科 助手

橋本　淳一 (ハシモト　ジュンイチ)

札幌から青森へ、今までと全く違う環境、そして業務内容。不安もありますが、楽しみな事もいっぱいです。学生と接しながら、学生と共に私自身も学んでいきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

＜退職＞ (H17.10.31付)

前野　竜太郎 (理学療法学科助手)

[大学院博士前期課程(二次)] 平成18年度入学者選抜試験のお知らせ

青森県立保健大学では、大学院博士前期課程(二次募集)の平成18年度入学者を募集しています。
詳しくは、大学院の「募集要項」をご覧下さい。
連絡先/教務学生課入試担当　TEL017-765-2144　FAX017-765-2188　E-mail nyushi@auhw.ac.jp

●大学院（健康科学研究科博士前期課程）

募集人員	健康科学専攻……　４名 地域保健福祉学分野、理学療法学分野 生活健康科学分野、看護学分野

出願期間	平成18年1月23日(月)～平成18年1月27日(金)
選抜試験	平成18年2月11日(土)
合格発表	平成18年2月17日(金)

編　集　後　記

第13号が発刊の運びとなった。たまたま創刊号にも携わったので、移ろう時の流れの早さを痛感している。

当時、２～３の他校の広報誌を参考にしながら、縦書き？横書き？名称は？等の検討作業から始まったと記憶している。

量も内容も充実の一途を辿っているように思える。本号も盛り沢山の内容である。

大学関係者はもとより、数多くの方々に読んで欲しいとも思う。大学を知ってもらい、興味・関心を持っていただき「私たちの保健大」として更に自由に市・県民が出入りするようになることを願っている。この広報誌にはその為の一助となる使命もあるように思える。

本格的な冬の始まりであるが、此の地の人々は誰もが、この時期から春を待ちわび始める。過ぎし春の一日、散歩中の老人に「大学の庭の花は、ここらあたりでは一番早く見られるので、毎年楽しみにしてます。」と声を掛けられた。

花壇の花のように、本学の教育・研究も又、あまねく愛されたいものだと思う。そして「活彩！保健大学だより」も又！

その為にも是非、県民皆様方のご意見、ご感想をお寄せいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。　（広報記録委員／八戸　宏）

◎ 広報記録委員会委員……
松江一、竹森幸一、鳴井ひろみ、山下弘二、八戸宏、廣森直子、森永八江、岡本健、坂本芳人、笹常春

◎ 広報記録委員会事務局担当……
工藤直之、天内孝志、蛯沢幸子

青森県立保健大学　〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2000(代表)
編集・発行／青森県立保健大学広報記録委員会　大学ホームページ　http://www.auhw.ac.jp/
(バックナンバーもご覧になれます。)

この印刷物は2,000部印刷し、印刷経費は1部あたり240円です。